恒武西宮遺跡８

Tsunetake-nishimiya Site
The 35th excavation report

浜松市教育委員会
2024 年 3 月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March,2024

例　言

1　本書は、静岡県浜松市中央区恒武町 159-1 において実施した恒武西宮遺跡 35 次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、株式会社スズケイの駐車場整備工事に先立ち実施した。現地の発掘調査作業・整理等作業及び報告書刊行作業は、株式会社スズケイからの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。

3　調査にかかわる費用は、全額株式会社スズケイが負担した。

4　発掘調査の面積と期間は、以下のとおりである。

調査面積　285 ㎡

調査期間　現地調査　令和５年（2023）１月 10 日～令和５年（2023）１月 24 日

整理作業　令和５年（2023）４月１日～令和６年（2024）３月 22 日

5　現地発掘調査及び整理作業は、川西啓喜（浜松市市民部文化財課）・井口美奈（同）が担当した。現地の写真撮影は川西が担当した。遺物の写真撮影は井口が担当し、川西が補佐した。

6　本書の執筆は、第１章と第２章３を井口が、その他を川西が行った。本書の編集は、川西が担当し、井口が補佐した。

7　調査の記録、出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

8　本書における方位は磁北、標高は海抜である。

9　土層・土器の色調は新版『標準土色帖』（農林水産庁農林技術会議局監修）に準拠した。

10　本書における遺構の略号は下記のとおりとする。

溝 :SD　土坑 :SK　小穴 :SP　不定形遺構・性格不明遺構 :SX

目 次

例 言

第１章　序 論……1

1　調査に至る経緯……1
2　恒武西宮遺跡をめぐる環境……2
3　恒武西宮遺跡の調査履歴……5

第２章　調査成果……7

1　調査の概要と基本層位……7
2　検出遺構……7
3　出土遺物……16

第３章　総 括……19

出土遺物観察表……22

図 版

第1章　序 論

1　調査に至る経緯

恒武西宮遺跡は、浜松市中央区恒武町及び貴平町に位置する古墳時代から戦国時代の遺跡である。市域の東境を流れる天竜川が形成した沖積平野上に本遺跡は所在する。恒武西宮遺跡の位置する恒武町、貴平町及び北側の笠井町周辺には、この沖積平野上の微高地が点在しているとみられ、広範囲で遺物の散布が認められる。

恒武西宮遺跡は、山ノ花遺跡、恒武西浦遺跡、恒武東覚遺跡と隣接しており、いずれの遺跡においてもこれまでの発掘調査により古墳時代から戦国時代の遺構・遺物が確認されている。これらの遺跡は、現在遺跡名を別にしているが、各遺跡間の境界は明確ではなく、関連性も強く認められることから総称して恒武遺跡群と呼ばれる。

恒武西宮遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓・掘立柱建物跡・自然流路、戦国時代の区画溝・掘立柱建物跡が検出されている。また、山ノ花遺跡では大型の自然流路（恒武大溝）が検出されており、自然流路内からは古墳時代中期の須恵器に加え、木製祭祀具や滑石製模造品などの祭祀関連の遺物が豊富に出土している。

奈良・平安時代において、恒武遺跡群の遺構は希薄となる。一方、恒武町の北に位置する笠井町周辺の笠井若林遺跡、笠井西浦遺跡などには奈良・平安時代の遺構が複数存在し、集落の中心が移り変わったとみられる。

令和４年（2022）に入り、恒武西宮遺跡の埋蔵文化財包蔵地内において、株式会社スズケイの駐車場整備工事が計画された。当該地の隣接地では、これまでに１次調査（1996）、６次調査（2000）及び21次調査（2018）が実施されており、その際の発掘調査の結果から、今回の工事範囲においても埋蔵文化財が及んでいることが想定された。そのため、開発事業者と遺跡の取扱いについて協議を行い、工事により遺跡の保護が図れない部分について、記録保存のための本発掘調査を実施することになった。

本発掘調査は、株式会社スズケイの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行った。現地調査は令和５年（2023）１月10日から１月24日にかけて実施した。調査対象面積は約285㎡である。

Fig.1　調査対象地の位置

2　恒武西宮遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

浜松市の東境を流れる天竜川は、長野県の諏訪湖を水源として遠州灘へと至る全長約 216 ㎞の長大な河川である。流域の大部分は山岳地帯に属しているが、天竜区以南から河口までの約 23 ㎞に沖積平野（天竜川西岸に広がる沖積平野）を形成している。この沖積平野は、東は三方原台地、西は磐田原台地に挟まれており、天竜川はその間を南流している。天竜川は、近世以降の河川改修を経た現在、流路は直線的に固定されているが、『続日本紀』によるとかつては「荒玉川（あらたまがわ）」と呼ばれ、氾濫増水による流路の変更が幾度となく繰り返されてきた。その後、鎌倉時代頃には天竜川の本流は磐田原台地側に移ったと推測されているが、著しい流路変更に伴い、沖積平野には複雑な微地形が形成された。

このような沖積平野の中央に位置する恒武西宮遺跡は、浜松市中央区恒武町に所在する。恒武町は北に隣接する笠井町とともに、比較的安定した扇状地上に位置している。本遺跡は扇状地の末端にあたり、当地より南側には比較的平坦な土地が広がっている。しかし、先に述べた天竜川の氾濫などにより、本流を含め流路の変更が頻繁に行われたことから、かつては流路が網の目のように入り組んだ地形を形成していたと考えられる。これらの流路の間に散在する安定した微高地上に、恒武西宮遺跡や近隣の多数の遺跡が分布する。

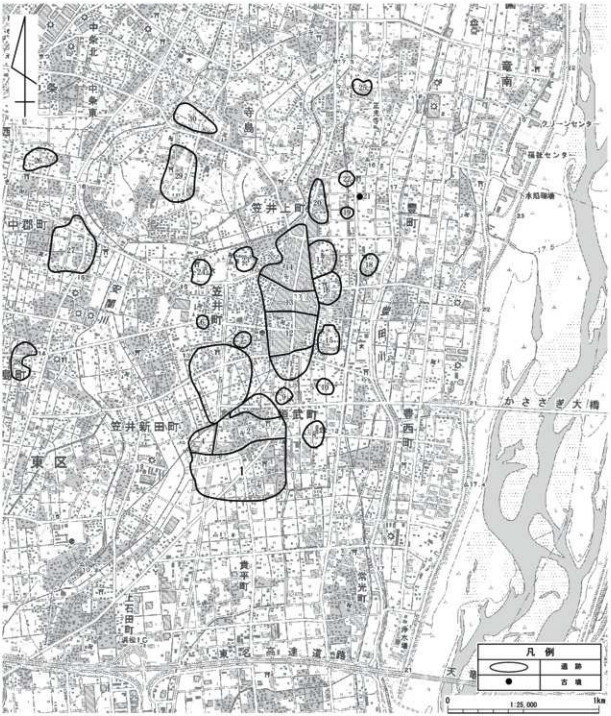
（2）歴史的環境

縄文時代以前　恒武・笠井地区における縄文時代以前の遺跡は、現状では確認することが極めて困難である。旧石器時代に関しては後世の土砂堆積が著しく、当時の生活状況を確認するに至っていない。縄文時代はいわゆる「縄文海進」と、のちの海退につれ、沖積平野が形成される途上の時期であり、恒武・笠井地区周辺は河道と湿地が交錯する景観が広がっていたと推測される。そのため、当時の人々の生活の中心は、三方原台地上に存在していたと考えられる。しかし、沖積平野での発掘調査において縄文土器がわずかに出土する例があり、今後の類例増加によっては景観復元に変更が加えられる可能性がある。

弥生時代　弥生時代になると、次第に天竜川西岸の沖積平野が安定化する。弥生時代前期では、宮竹野際遺跡、山の神遺跡などで弥生時代前期併行期の土器が確認されている程度であり、依然として人為的活動の痕跡は乏しい。しかし、弥生時代中期以降、恒武・笠井地区より南側の平野上において集落の形成が認められ、遺跡数が増加する。弥生時代中期の遺跡として、大蒲町村東Ⅰ遺跡、田見合遺跡、箕輪遺跡、海東遺跡が挙げられるほか、水田が確認された宮竹野際遺跡や、搬入土器や有孔磨製石剣等を含む豊富な遺物が出土し、拠点的な集落であったと考えられる将監名遺跡が注目される。

弥生時代後期になると平野部の遺跡はさらに増加し、平野部への集落の進出が盛行する時期と考えられる。発掘調査で確認された遺跡だけでも中田北遺跡、天王中野遺跡、将監名遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、松東遺跡、森西遺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、海東遺跡などを挙げることができ、非常に多くの集落が平野上に形成されたことが認められる。

一方、恒武・笠井地区では、このような近隣の地域における様相とは対照的に、弥生時代の遺構や遺物の検出例が乏しい状況である。しかし、近年の発掘調査において、従来古墳時代以降の遺跡と考えられてきた社口遺跡から、弥生時代中期後葉の長頸壺が完形で出土しており、今後の発掘調査の事例増加を待ちつつ再検討を行う必要がある。



1	**恒武西宮遺跡**	11	笠井東遺跡	21	蛭子森古墳
2	恒武西浦遺跡	12	笠井下組遺跡	22	八幡西遺跡
3	恒武東覚遺跡	13	笠井中組遺跡	23	御殿山東遺跡
4	山ノ花遺跡	14	笠井上組遺跡	24	御殿山遺跡
5	笠井若林遺跡	15	八ッ面遺跡	25	上石原遺跡
6	笠井町広野遺跡	16	宮前遺跡	26	橋爪遺跡
7	笠井西浦遺跡	17	大通西遺跡	27	万斛遺跡
8	茶ノ木田遺跡	18	服織神社境内遺跡	28	上大瀬遺跡
9	社口遺跡	19	八幡南遺跡	29	宮東遺跡
10	平松遺跡	20	隋国遺跡	30	寺島天神遺跡

Fig.2　恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布

古墳時代　古墳時代に入ると、沖積平野における弥生時代後期までの濃密な遺跡分布の様相が一変する。大規模な集落は姿を消し、小規模な集落が造営されたと考えられる。こうした変化と連動して、恒武・笠井地区ではそれまでにない人為活動の痕跡が確認されるようになる。恒武西宮遺跡においては、古墳時代前期（元屋敷Ⅱ式）の方形周溝墓や葬送儀礼に伴う土器集積が確認されており、墓域や祭祀場として利用されたことがうかがえる。

古墳時代中期になると、沖積平野を見下ろす丘陵や台地上に古墳が築かれるようになる。特に三方原台地東縁一帯には、中期から後期にかけて 500 基を超える古墳群が築造されており、これらは三方原古墳群と総称される。一方、平野部においては、恒武遺跡群の山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡で確認された大溝が中期における特筆すべき遺構である。大溝内からは、多くの木製や石製の祭祀遺物に加えて、大量の土器が出土している。こうした発掘調査の結果から、古墳時代の祭祀の一端が知られることとなり、恒武遺跡群で行われたこのような祭祀儀礼は、当地を治める有力な首長層が取り仕切ったものと推定される。

古墳時代後期の恒武・笠井地区周辺では、豊町に立地する蛭子森古墳が特筆される。当古墳は直径 23.6 m、高さは現状で約 3 m を測る円墳である。玄室は、右片袖式の横穴式石室であり、玄室内に残された板石の状況から、組み合わせ式石棺が安置されていたと考えられる。出土遺物には、鳥装飾付須恵器などをはじめとする土器のほか、金環・勾玉・太刀・馬具等の豊富な副葬品が出土している。蛭子森古墳は、多くの古墳が丘陵などに立地する中で沖積平野に築造された数少ない事例として注目され、被葬者は群集墳を築造した集団とは隔絶した存在であったと考えられる。同時期の集落は恒武西宮遺跡で確認されており、本遺跡を中心とした古墳時代後期の人為的文化活動が盛んに行われていたと推測できる。

古代　律令体制下において静岡県の西部は遠江国に属し、恒武・笠井地区およびその周辺には麁玉・長田・磐田郡の各郡がおかれた。やがて長田郡は和銅 2 年（西暦 709 年）に長上・長下の二郡に分割され、後世には磐田郡から豊田郡が分離されたが、これらの郡のうち、いずれに古代の恒武・笠井地区が属していたかは明確に分かっていない。近世と古代の郡境を同一視することにはいささかの問題もあるが、近世においては恒武・笠井地区を分断するように郡境が存在しており、笠井町は長上郡に、恒武・貴平・豊西町は豊田郡に属している。また、近世の郡境が錯綜していることから、天竜川の流路跡と対応している可能性が高く、古代においても天竜川の流路跡を郡境とし、錯綜していたと考えられる。

笠井地区周辺では、笠井若林遺跡において奈良時代から平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡が集中的に確認されており、集落が営まれていたことが判明している。一方、同時期の恒武西宮遺跡では、遺構や遺物が希薄であることから、主に笠井若林遺跡に人々が住んでいたと推測でき、時代の変遷に従って集落の中心地が変化したと考えられる。

中世　中世において笠井地区周辺は、羽鳥庄と美薗御厨に含まれると考えられているが、これらの荘園についての情報は極めて少なく、実態は明らかでない。この時期の遺構は比較的多く見つかっており、御殿山遺跡・笠井若林遺跡及び恒武東覚遺跡では山茶碗等の遺物が出土している。また、恒武西宮遺跡では鎌倉時代の菊花双鳥鏡が採集されている。

中世後半になると笠井地区の全域で遺構や遺物が確認されている。なかでも、恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡において、16 世紀頃と考えられる方形に区画された屋敷地跡が見つかっている。これらの区画は現在の地境とほぼ一致することから、この時期に形成された地割が現代まで継承されていることがうかがえる。

3　恒武西宮遺跡の調査履歴

恒武西宮遺跡では、本報告書を作成した2024年3月までに、小規模開発に伴う予備調査を含めて35回の調査が行われている。過去の調査のうち特筆すべきものを以下に述べる。

1・2次調査は、県道浜松環状線の建設工事に伴い行われ、古墳時代中期～後期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・自然流路跡などが検出されたことから、調査地一帯が古墳時代の集落域であることが判明した。加えて、土坑から滑石製模造品が大量に出土し、一般的な集落とは異なる性質の遺跡である可能性が指摘された。また、戦国時代の建物跡や区画溝が検出され、当該期の屋敷地が広がることも明らかとなった。

3次調査と6次調査は、県道浜松環状線に接続する市道拡幅工事に先立ち実施された。古墳時代中期～後期の建物跡・自然流路、戦国時代の区画溝が確認された。また、下層からは古墳時代前期の方形周溝墓と土器集積が検出されており、元屋敷式期の良好な資料として注目される。

18次調査は、工場建設に伴い実施され、調査箇所の西側で集落の中心にあたる高位面、東側で湿地状の堆積がみられる低位面を確認した。特筆すべき点として、高位面で古墳時代前期の竪穴建物跡

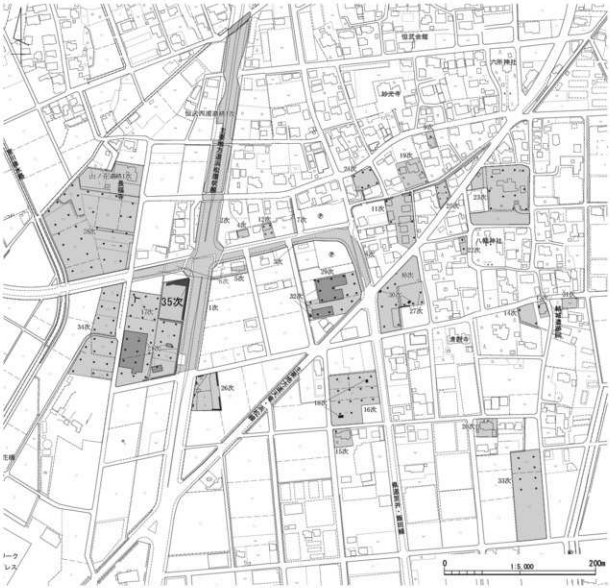


Fig.3　恒武西宮遺跡の調査履歴

が検出されたことが挙げられる。竪穴建物跡の北東からＳ字甕（Ｃ類）が出土していることから、集落は３世紀後半に形成されたものとみられている。

21 次調査は、物流センター建設工事に伴い行われ、古墳時代後期を中心とする豊富な遺構と遺物が確認された。当該期の遺構として掘立柱建物跡が検出されたほか、１次調査で確認された自然流路に接続するとみられる３条の東西溝から、石製模造品・金銅製耳環・土師器・須恵器が出土した。また、これらの溝に先行する１条の南北溝も存在し、並行する土坑から有稜高坏が出土したことから、古墳時代中期にまで遡る可能性が考えられる。

これまでの調査成果から恒武西宮遺跡の各時代における様相をまとめると、古墳時代前期は遺跡の東側、古墳時代中期～後期は遺跡の西側において遺構・遺物が多く確認されている。奈良時代の遺構は北側に数基見られる程度であり、古代の遺構・遺物は少ない。その後、戦国時代に入ると遺跡の全域で区画溝を中心とした遺構・遺物が確認できるようになる。このように、本遺跡における人為的活動の中心は時代の変遷とともに変化していたと考えられ、調査事例の増加とともにその推移が明らかになりつつある。

Tab.1　恒武西宮遺跡調査履歴一覧

次数	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	報告書	発行年
1 次	1996. 9 ～ 1997. 3 2002. 4 ～ 2002. 5	3, 670	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮・西浦遺跡』 『恒武西宮遺跡Ⅲ・笠井若林遺跡Ⅱ』	2000 2005
2 次	1998. 10 ～ 1999. 6	2, 420	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』	2002
3 次	1998. 9 ～ 1999. 1	1, 700	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
4 次	1999. 5	88	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
5 次	1999. 12	100	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
6 次	2000. 10 ～ 12	1, 200	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
7 次	2000. 11 ～ 12	40	浜松市教育委員会	戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
8 次	2007. 11 ～ 12	390	(財) 浜松市文化振興財団	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡８次』	2009
9 次	2007. 12	4	浜松市教育委員会	古墳～中世	『浜松市遺跡調査概要』	2009
10 次	2008. 4	25	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成 21 年度浜松市遺跡調査概要』	2011
11 次	2010. 9	20	浜松市教育委員会	古墳～鎌倉	『平成 22 年度浜松市遺跡調査概要』	2012
12 次	2014. 9	10	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成 26 年度浜松市遺跡調査概要』	2016
13 次	2015. 6	5	浜松市教育委員会	古墳～中世	『平成 27 年度浜松市遺跡調査概要』	2017
14 次	2016. 3	8	浜松市教育委員会	古墳	『平成 27 年度浜松市遺跡調査概要』	2017
15 次	2016. 10	5	浜松市教育委員会	なし	『平成 28 年度浜松市遺跡調査概要』	2018
16 次	2016. 10	56	浜松市教育委員会	古墳	『平成 28 年度浜松市遺跡調査概要』	2018
17 次	2017. 3	148	浜松市教育委員会	古墳	『平成 28 年度浜松市遺跡調査概要』	2018
18 次	2017. 4	36	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市遺跡調査概要』	2019
19 次	2017. 8	12	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市遺跡調査概要』	2019
20 次	2017. 8	4	浜松市教育委員会	古墳	『平成 29 年度浜松市遺跡調査概要』	2019
21 次	2017. 11 ～ 2018. 2	1, 704	浜松市教育委員会	古墳	『恒武西宮遺跡６』	2018
22 次	2018. 5	8	浜松市教育委員会	戦国・江戸	『平成 30 年度浜松市遺跡調査概要』	2020
23 次	2018. 6	44	浜松市教育委員会	古墳・中世	『平成 30 年度浜松市遺跡調査概要』	2020
24 次	2018. 11	25	浜松市教育委員会	古墳・中世	『平成 30 年度浜松市遺跡調査概要』	2020
25 次	2018. 11	14	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『平成 30 年度浜松市遺跡調査概要』	2020
26 次	2019. 4	53	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
27 次	2020. 1	16	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
28 次	2020. 2	120	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
29 次	2020. 3	68	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
30 次	2020. 6 ～ 7	33	浜松市教育委員会	古墳	『令和２年度浜松市遺跡調査概要』	2022
31 次	2021. 3	2	浜松市教育委員会	古墳	『令和２年度浜松市遺跡調査概要』	2022
32 次	2022. 1 ～ 3	1, 400	浜松市教育委員会	古墳	『恒武西宮遺跡７』	2022
33 次	2022. 2	32	浜松市教育委員会	なし	『令和３年度浜松市遺跡調査概要』	2023
34 次	2022. 3	76	浜松市教育委員会	奈良・平安	『令和３年度浜松市遺跡調査概要』	2023
35 次	2023. 1	285	浜松市教育委員会	古墳・鎌倉	本書	2024

第２章　調査成果

１　調査の概要と基本層位

調査の概要　本発掘調査は、駐車場整備工事に先立ち、遺跡の保護を図ることができない擁壁・水路及び調整池部分を対象に実施した。発掘調査の結果、調査対象地の全域において、古墳時代と鎌倉時代を中心とした遺構・遺物を確認した。遺構は、溝・土坑・小穴のほかに、井戸を検出した。出土遺物は、全形のうかがえるものは乏しく、大半が砕片であったが、井戸の埋土から鎌倉時代の山茶碗が１点完形で出土した。

基本層位　今回の調査対象地の近隣では、これまでに道路建設（１次・６次）や物流センター建設（17 次・21 次）に伴う発掘調査が実施されている。そのため、層位関係はこれらの調査成果を参考にして、整合をはかった。

調査区の北壁と東壁において土層堆積状況を確認し、観察結果を Fig.5 に示した。土層堆積は、以下のとおり、大きく３層に分層できる。

I 層は、灰色シルト及び灰褐色シルトからなる現代の水田耕作土および床土である。１・２層が該当する。

II 層は灰褐色シルトおよび砂質シルトからなる。II 層内は、地点により細分化することが可能であったが、近隣での調査成果を踏まえて IIa 層（本調査における３層）と IIb 層（本調査における 83 層）に分層した。

IIa 層は古墳時代から鎌倉時代の遺物包含層である。中心となるのは古墳時代と鎌倉時代の遺物であるが、わずかに奈良時代の遺物も含まれる。

IIb 層は灰褐色砂質シルト層である。IIa 層と IIb 層は極めて近似した色調であるが、IIb 層は IIa 層と比べて砂質が強い傾向がみられる。

土層断面を観察したところ、遺構は II 層内から掘り込まれていることを確認した。遺構は下位ほど古い時代の傾向がみられるものの、層位的に時期を分離することはできなかった。また、IIa 層内で確認した遺構は、厳密な掘り込み面を把握することが困難であった。そのため、ある程度遺構のまとまりを把握することが可能な IIb 層上面において遺構検出を行った。なお、IIb 層は、調査区の北東側で高く、南西側に向かって低くなることを確認した。

２　検出遺構

検出遺構の概要　調査区内において溝・土坑・小穴を中心とした遺構を検出した（Fig.4）。確認した遺構は、溝 27 条、土坑 24 基、小穴 28 基、井戸１基、性格不明遺構２基である。

遺構内からの出土遺物は乏しく、小破片が中心であったため、遺構の帰属時期を明確にし難いが、出土した土器の年代から古墳時代中期～後期を中心に、一部、鎌倉時代のものが確認された。

古墳時代の遺構は、溝と土坑を中心に確認した。特筆される遺構として、土坑（SK13）内から６～７世紀の土器に加えて、獣骨と円礫・角礫が出土した。

鎌倉時代の遺構は、土坑と井戸を確認した。なかでも、調査区の北西において井戸（SE01）を１基検出し、埋土から完形の山茶碗が１点出土した。

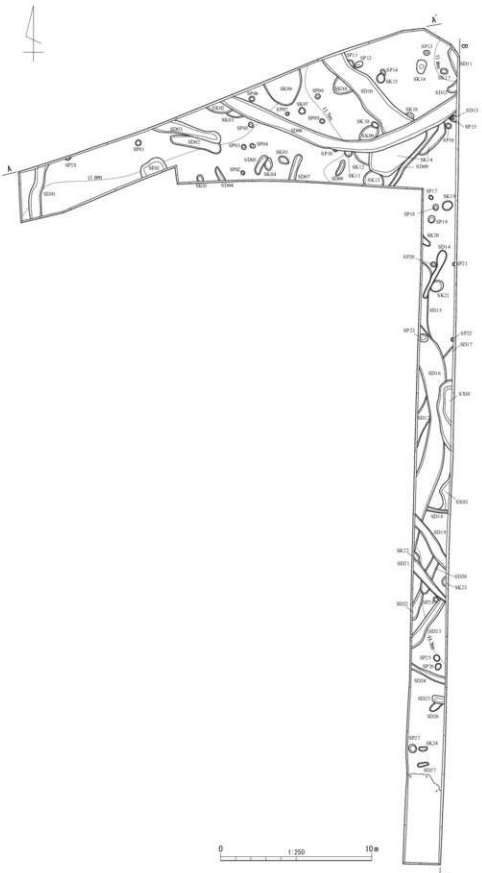


Fig.4　調査区全体図

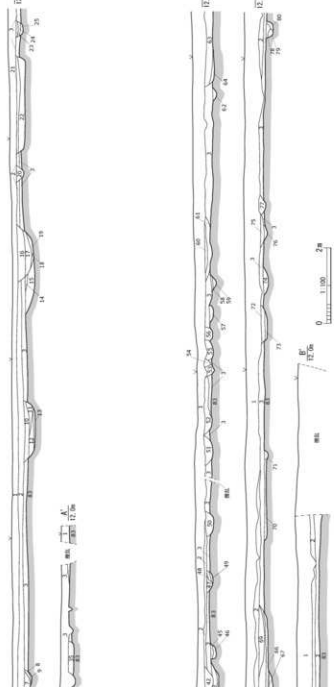


Fig.5　調査区北壁・東壁土層断面図

SD02・SD03（Fig.6）　調査区の北西部で検出した東西方向に延びる溝である。SD02 は全長 3.2m、SD03 の西端は調査区外へと及んでいるため本来の規模は不明であるが、調査区内で長さ 4.6m を検出した。土層断面を観察したところ、SD02 は SD03 に切られていることを確認した。出土遺物は、細片のため図化できたものはないが、須恵器と土師器が出土した。これらの遺物の年代から、SD02・SD03 は 6 ～ 7 世紀の遺構と考えられる。

SD04（Fig.6）　調査区の北西部で検出したおおむね南北方向に延びる溝である。SD04 の南端は調査区外へ及んでいたが、調査区内で長さ 1.0m を検出した。埋土から土師器の高坏の脚部（Fig.13-1）が出土したことから、5 世紀代の遺構と考えられる。

SD05・SK04（Fig.6）　調査区の北西部で検出した溝と土坑である。SD05 は全長 1.4m、幅 0.4m、深さ 0.1m の北東から南西方向に延びる溝である。SK04 は南北 0.8m、東西 0.5m、深さ 0.1m の土坑である。土層断面を観察したところ SK04 は SD05 に切られていることを確認した。出土遺物は、図化できたものはないが、SD05 から 6 ～ 7 世紀代の須恵器と土師器の小片が出土した。SK04 から出土遺物は確認されなかったが、SD05 と埋土の色調が近似していることから、6 ～ 7 世紀代の遺構と推察される。

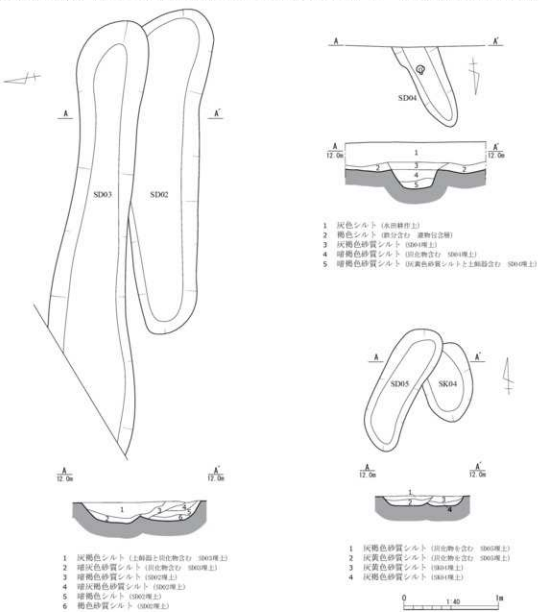


Fig.6　SD02・SD03、SD04、SD05・SK04 詳細図

SD06・SD10（Fig.7）　調査区の北部周辺で確認した溝である。SD06 は南東方向に延びるが、調査区内で進路を北東方向に変える。両端は調査区外に及んでいるが、長さ 16.5m を確認した。幅はおおむね 0.8m、深さは 0.15m である。幅がやや異なるが、1 次調査の成果と整合した結果、SR11 と同一遺構の可能性が高い。SD10 は北西方向に延びる溝である。北西部は調査区外、南東部は SD06 に切られている。調査区内で確認した規模は、長さ 6.3m、幅 1.5m、深さ 0.2m である。いずれの遺構も出土遺物は破片が多く、図化できたのは、SD06 は陶器の甕（Fig.13-2）、SD10 は須恵器の坏身と甕（Fig.13-3,4）のみであった。これらの遺物から、SD06 は 12 ～ 13 世紀と考えられ、SR11 の年代も合致する。SD10 は主体となる遺物の年代から 7 世紀代の遺構と考えられる。

SD17（Fig.7）　調査区の中央部で検出した北東方向に延びる溝である。SD17 の両端は調査区外へと及んでおり、また SD16 と SX01 に切られているため、全容は不明である。調査区内において確認した規模は幅 1.0m、深さ 0.3m である。なお、1 次調査の成果と整合させた結果、SR5 と同一遺構と考えられる。出土遺物は須恵器及び土師器（Fig.13-6 ～ 16）を中心に出土した。これらの遺物の年代から、SD17 は 7 ～ 8 世紀の遺構と考えられる。

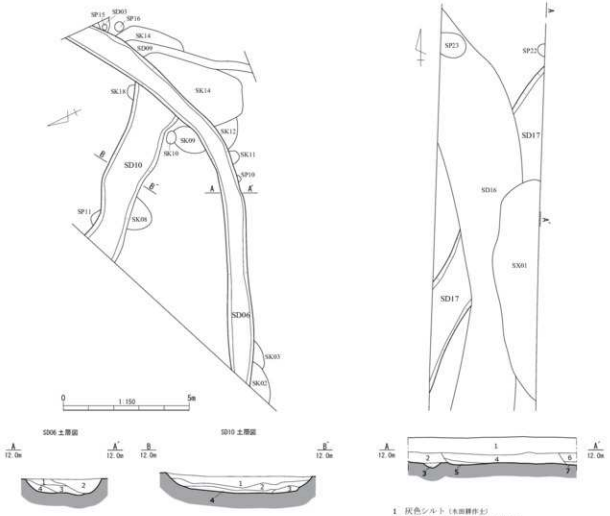


Fig.7　SD06・SD10、SD17 詳細図

SK06（Fig.8） 調査区の北部で検出した土坑である。北側は調査区外へと及んでいるため全容は不明であるが、調査区内で確認した規模は、東西 2.5m、南北 1.9m、深さ 0.25m である。出土遺物は土師器の高坏と壺（Fig.13-17,18）の破片が出土した。これらの遺物から、5 世紀代の遺構と考えられる。

SK09・SK10（Fig.8） 調査区の北東部で検出した土坑である。SK09 は北側を SK10、南側を SD06 に切られているが、調査区内で東西 1.0m、南北 1.2m、深さ 0.15m を確認した。SK10 の規模は、東西 0.5m、南北 0.35m、深さ 0.1m である。いずれの土坑も出土遺物は乏しく、SK09 からは須恵器の甕（Fig.13-19）が 1 点出土したが、SK10 からは出土遺物はなかった。帰属時期は、出土遺物の年代から SK09 は 5 世紀代、SK10 は 5 世紀以降と捉えておきたい。

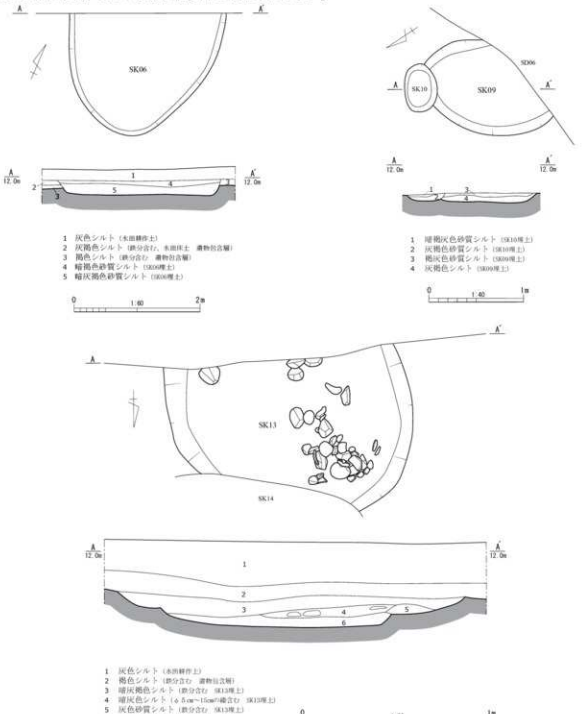


Fig.8 SK06、SK09・SK10、SK13 詳細図

SK13（Fig.8） 調査区の北東部で検出した土坑である。SK13 は北側を SK14、南側は調査区外へと延びているため、正確な規模は不明であるが、調査区内で確認した規模は、東西 1.3m、南北 0.7m、深さ 0.4m である。出土遺物は、土師器と須恵器の破片が出土したが、図化できたものは、土師器の鉢もしくは甑の把手（Fig.13-22）1 点のみであった。帰属時期は、出土した遺物の年代から 6 ～ 7 世紀の遺構と捉えられる。また、その他に獣骨と直径 5 ～ 10cm 程度の円礫及び角礫が出土した。これらの遺物は、土坑の南東側にやや集中する傾向はみられるものの、円礫及び角礫は土坑内に点在する。切り合いなどにより SK13 の詳細は不明ではあるものの、祭祀に係わる遺構の可能性が考えられる。

SK12・14（Fig.9） 調査区の北東部で検出した土坑である。SK12 は、SD06 と SK14 に切られており、本来の規模は不明である。調査区内で確認した規模は、東西 1.1m、南北 0.8m であるが、本来の規模の 1/4 程と考えられる。出土遺物は、土師器の高坏（Fig.13-20,21）が出土した。出土遺物の年代から 5 世紀代の遺構と捉えられる。

SK14 は周辺の遺構との切り合いが激しく、特に中央を SD09 に切られている。詳細な規模は不明であるが、東西方向に長い楕円形を呈すると想定される。なお、確認した深さは 0.45m である。遺物は、古墳時代と鎌倉時代のものを確認したが、主体となる遺物の年代から、12 ～ 13 世紀代の遺構と考えられる。

SK16（Fig.9） 調査区の北東部で検出した土坑である。規模は、東西 0.6m、南北 0.9m、深さ 0.45m であり、南北方向にやや長い楕円形を呈する。出土遺物は土師器が数点出土したが、いずれも小破片であるため図化できたものはなかった。SK16 の帰属時期は、出土遺物が少ないため明確にし難いが、古墳時代中期～後期の遺構と捉えておきたい。

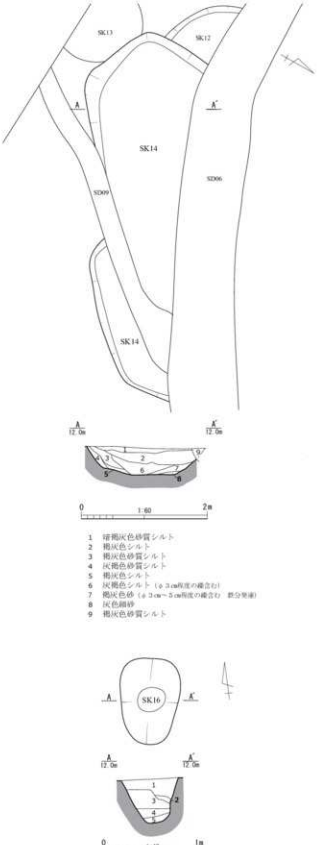


Fig.9　SK12・SK14、SK16 詳細図

小穴（Fig. 10） 調査区内において小穴28基を検出した。小穴は調査区の北部から北東部にかけてやや集中する傾向がみられたが、調査区の全域で確認された。検出した小穴の規模は、いずれも0.3～0.5mであり、埋土は褐色系シルトもしくは砂質シルトである。小穴の中には、一部柱痕をもつものも見られたが、明確な建物のプランをうかがうことはできなかった。また、小穴内からの出土遺物は極めて乏しく、土師器の小破片のみであったため、図化できたものは全くなかった。したがって、いずれの小穴も年代を決め難いと言わざるをえないが、出土した土師器の特徴から、おおむね古墳時代中期～後期に帰属すると考えられる。

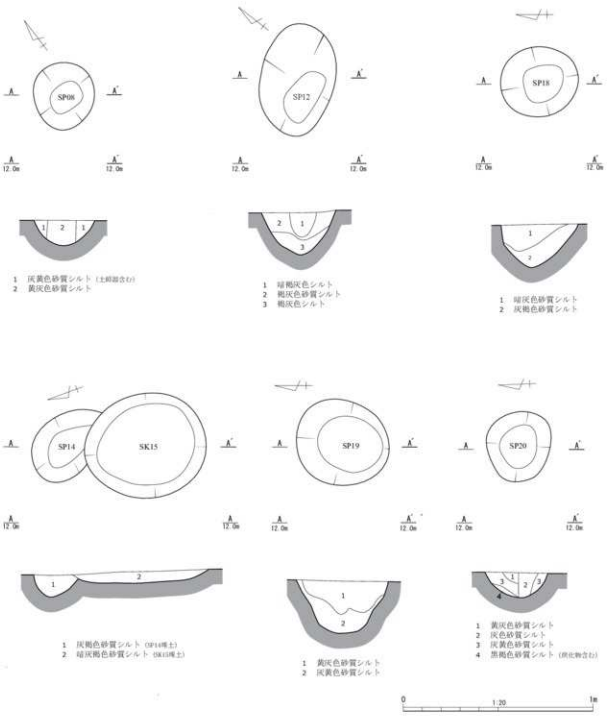
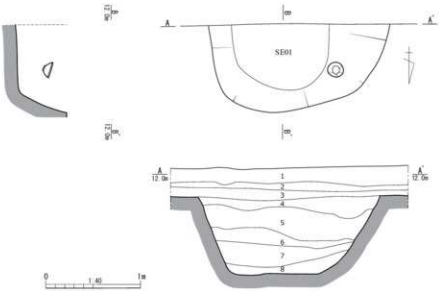


Fig.10　小穴詳細図

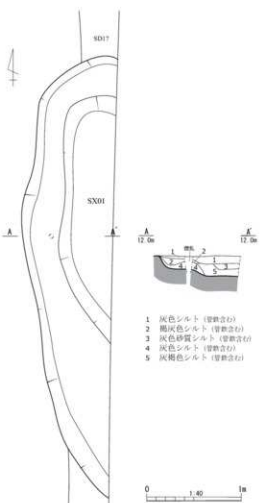


1 灰色シルト（水田耕作土）
2 灰褐色シルト（鉄分含む　本田灰土　遺物包含層）
3 褐色シルト（鉄分含む　遺物包含層）
4 暗褐灰色シルト（鉄分含む　SB01埋土）
5 暗褐灰色シルト（灰色シルトブロックと鉄分含む　SB01埋土）
6 褐灰色砂質シルト（鉄分含む　SB01埋土）
7 褐灰色シルト（灰色シルトブロックと鉄分含む　SB01埋土）
8 褐灰色シルトと暗灰色シルトの混層（鉄分含む　SB01埋土）

Fig.11　SE01 詳細図

SE01（Fig.11）　調査区の北西部で検出した素掘りの井戸である。SE01 の南側は調査区外へと及んいるため、本来の規模は不明であるが、調査区内で確認した規模は、東西 1.9m、南北 0.9m、深さ 0.9m である。埋土は 5 層に分けられ、いずれも褐色系シルトを主体とし、灰色シルトブロックが含まれる。最下層にあたる 8 層においても同様の堆積状況が認められることから、比較的短期間のうちに埋められたとみられる。出土遺物は、土師器の甕（Fig.14-36）と中世陶器の山茶碗（Fig.14-37）を確認した。主体となる遺物の年代から、12 ～ 13 世紀の遺構と考えられる。

SX01（Fig.12）　調査区の中央部で検出した。東側は調査区外に及んでいるため、全容は不明であるが、南北に長い不定形を呈すると考えられる。調査区内で確認した規模は、南北 4.6m、東西 0.95m である。深さは、東側で 0.2m と最も深く、外側に向かって 0.1m 程高くなりテラス面を持つ。出土遺物は、破片が多く、図化できたものは限られるが、須恵器、土師器、中世陶器（Fig.14-38 ～ 40）が出土した。主体となる遺物の年代から 6 ～ 8 世紀の遺構と捉えられる。



1 灰色シルト（管鉄含む）
2 褐灰色シルト（管鉄含む）
3 灰色砂質シルト（管鉄含む）
4 灰色シルト（管鉄含む）
5 灰褐色シルト（管鉄含む）

Fig.12　SX01 詳細図

3　出土遺物

出土遺物の帰属時期は、古墳時代中期から後期と鎌倉時代が中心である。全形のうかがえるものは、SE01 から出土した山茶碗のみであり、その他は全て破片である。

古墳時代の遺物は、5 世紀代の土師器や古相の須恵器の甕等と、6 ～ 7 世紀代の遺物が比較的多く確認された。古代の遺物は希薄であるが、奈良時代の有台坏身や甕が少量出土した。中世の遺物は、12 ～ 13 世紀代の山茶碗を中心として、陶器がわずかに出土した。

SD04　1 は土師器の高坏である。屈折脚部高坏の脚部で、5 世紀の遺物と考えられる。

SD06　2 は陶器の甕である。破片のため、詳細な時期は不明であるが、中世の遺物と捉えられる。

SD10　3・4 は須恵器である。3 は坏身の底部片で、7 世紀の遺物と考えられる。4 は甕の口縁部片である。内面には自然釉が付着し、5 世紀の遺物と考えられる。

SD17　5 は 7 世紀の須恵器の坏身である。6 は須恵器の高坏である。半球形の坏部を持つ高坏の坏部で、脚部は欠損する。胎土の特徴から 7 世紀の湖西産の遺物と考えられる。7・8 は須恵器の甕の口縁部片である。7 は 7 ～ 8 世紀、8 は 8 世紀の遺物である。9 ～ 12 は 5 世紀の土師器の高坏である。13 は 5 ～ 6 世紀の土師器の壺である。口縁部片で、内外にヨコナデが施されている。14・15 は土師器の甕の底部である。15 は外面にオサエ、内面にハケが施されている。いずれも 7 ～ 8 世紀の遺物と考えられる。16 は 12 ～ 13 世紀の山茶碗の高台部である。

SK06　17･18 は土師器である。17 は高坏、18 は二重口縁壺である。18 は全体的に摩滅しているが、外面は口縁から頸部までヨコナデ調整、肩部には縦方向に 3 本の線刻が施されている。内面は頸部と肩部の間にオサエがみられる。いずれも 5 世紀の遺物と考えられる。

SK09　19 は須恵器の甕の口縁部片である。内外に自然釉がみられ、外面には櫛描波状文が施される。5 世紀の遺物とみられる。

SK12　20･21 は土師器の高坏である。21 は僅かに坏部が残る。いずれも 5 世紀の遺物と考えられる。

SK13　22 は土師器である。5 ～ 7 世紀の甑、もしくは把手付鉢の把手と考えられる。

SK14　23 は 5 世紀の須恵器の器台である。脚部の小片であるが長方形の透かし孔が確認でき、波状文と刺突文が施される。24 は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境に稜があり、口唇部には段を有する。6 世紀前半の遺物と考えられる。25 は須恵器の甕の口縁部片である。沈線間に刺突文が施されており、7 ～ 8 世紀の遺物と考えられる。26・27 は 5 世紀の土師器の高坏である。28 は 5 ～ 6 世紀の土師器の壺の底部である。

29 ～ 35 は山茶碗である。高台は 30 のように高く作るものから、35 のように極めて低く退化したものもみられる。いずれも 12 ～ 13 世紀の遺物と考えられる。

SE01　36 は 7 世紀の土師器の甕である。口縁は大きく外反し、口縁部の内外にヨコナデが施されている。37 は山茶碗である。完形で出土した。12 ～ 13 世紀の遺物と考えられる。

SX01　38 は 8 世紀の須恵器の甕である。39 は 5 世紀の土師器の高坏である。40 は山茶碗である。高い高台をもち、内・外面に自然釉がみられる。12 世紀の遺物と捉えられる。

遺構外　41 ～ 48 は遺構外から出土した遺物である。41 ～ 43 は須恵器である。41 は 6 世紀の坏身、42 は 8 世紀の無台碗である。43 は有台坏身である。底部は比較的平たく作られており、高台より下に出ない。8 世紀前半の遺物と考えられる。44 は 5 世紀の土師器の高坏である。45 は 5 ～ 6 世紀の土師器の折返口縁壺である。46 は 5 ～ 7 世紀の土師器の甑、もしくは把手付鉢の把手である。47・48 は 12 ～ 13 世紀の山茶碗である。

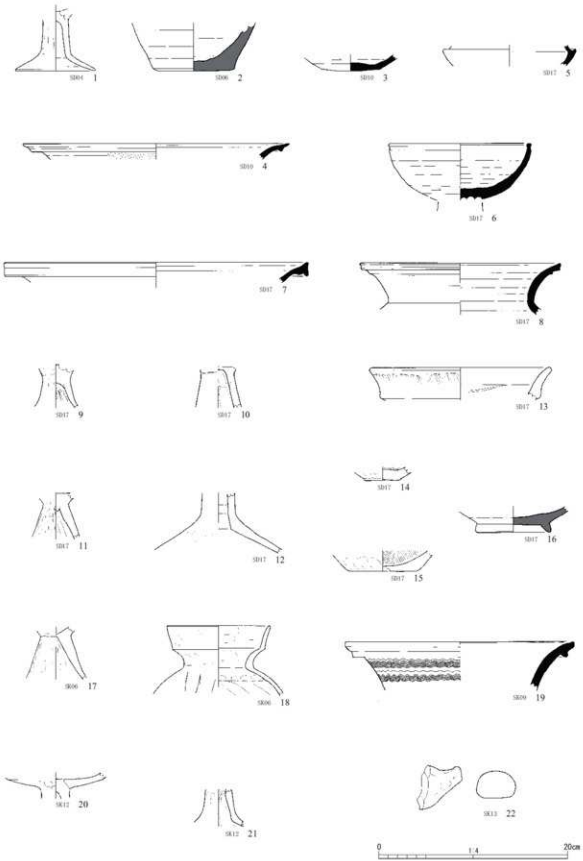


Fig.13　主要出土遺物（1）

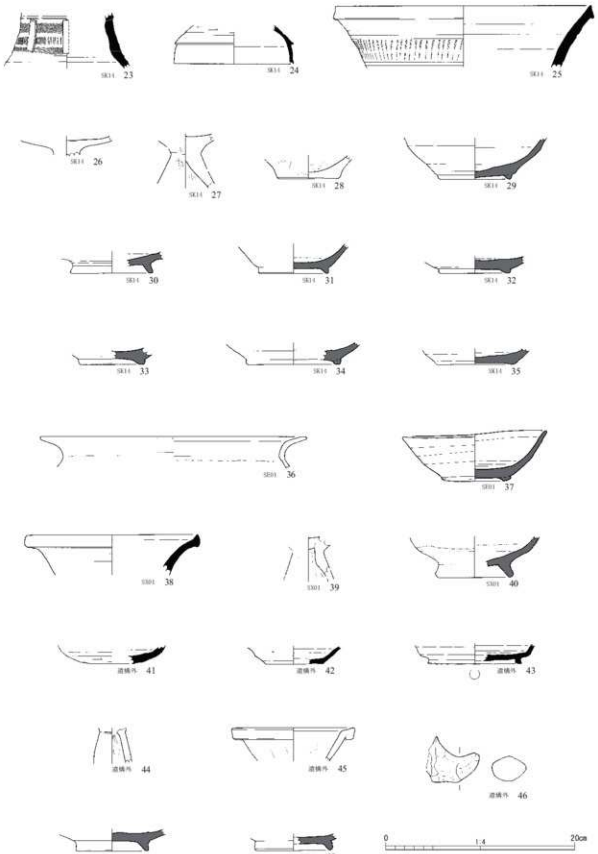


Fig.14　主要出土遺物（2）

第3章　総 括

恒武西宮遺跡 35 次調査では、遺構内からの出土遺物が少なく、帰属時期を明確にできたものは多くはなかったが、古墳時代中期～後期と鎌倉時代を中心とした遺構・遺物を確認した。最後に、今回の発掘調査成果とこれまでの当遺跡と周辺遺跡の調査結果を踏まえ、得られた知見を時代ごとにまとめて総括したい。

古墳時代　古墳時代中期の土坑と溝を調査区の北側で確認した。周辺の調査では、当遺跡の北側に位置する山ノ花遺跡において、自然流路（恒武大溝）内から木製祭祀具や滑石製玉類などの祭祀関連の遺物が多数出土している。自然流路の南岸では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、集落跡の存在が明らかとなっているが、今回の調査では明確な建物跡は確認されなかった。当調査区の南側で実施した 21 次調査では、さらに同時代の遺構の密度は低くなることから、当該地は集落の縁辺部に位置すると考えられる。

Fig.15　恒武西宮遺跡周辺の古墳時代の様相

古墳時代後期の遺構は、溝と土坑を中心に確認した。調査区の中央部で検出したSD17は、1次調査で検出した自然流路（SR5）と同一遺構と想定され、遺構内からは比較的多くの遺物が出土した。当該期の遺構は古墳時代中期と比べて増加し、さらに、遺構の分布は調査区の北側が中心ではあるものの、南側においても確認された。遺構数の増加や分布の広がりは、周辺での調査成果からも同様の様相が認められ、6～7世紀頃に南側から東側にかけて、集落域が広がっていったとみられる。恒武西宮遺跡において、最も遺構が広範囲に広がる時期と考えられる。

また、調査区の北側で検出した土坑（SK13）内から、6～7世紀の土器と共伴して獣骨が出土した。土坑内からは、土器と獣骨のほかに、複数の円礫と角礫も出土しており特異性がうかがえる。恒武西宮遺跡では、1・21・26・32次調査において、同時期の滑石製模造品が出土しており、古墳時代中期に山ノ花遺跡を中心とした祭祀が、古墳時代後期には散発的ではあるものの、継続的に行われていたことがうかがえる。SK13は、検出状況から墓の可能性も考えられるが、周辺の調査成果から、何らかの祭祀関連の遺構と想定される。

鎌倉時代　調査区の北部において溝・土坑・井戸を確認した。溝（SD06）は、1次調査で検出さ

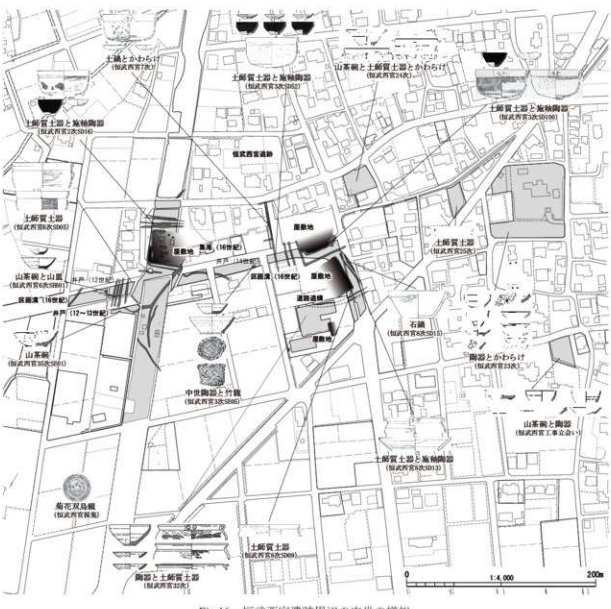


Fig.16　恒武西宮遺跡周辺の中世の様相

れた SR11 と同一遺構と考えられる。SD06 は調査区内で北西から東へと湾曲するが、明確に屋敷地などの方形区画とは言い難い。全容が不明であるため、今後の調査事例の蓄積を待って検討を行う必要がある。また、今回の調査では遺物が出土しなかったため、詳細は不明であるが、調査区の南側で検出した北西方向に延びる溝（SD19、SD21）は、1 次調査で確認された SR06 と方向や幅等が似ていることから、中世の自然流路の可能性が高いと考えられる。

調査区の北西側で井戸を 1 基検出した。恒武西宮遺跡では、3 次調査で 14 世紀代、6 次調査で 12 世紀代の井戸が検出されているが、今回の調査を含めて鎌倉時代の明確な建物跡は検出されておらず、集落の様相は依然として不明である。しかしながら、出土量は多くなないものの、SK14 を中心として当該期の遺物が確認されていることから、周辺に小規模な集落が存在していた可能性が想定されよう。

［参考文献］

太田好治　2001 「浜松市の中世遺跡にかかわる基礎資料」『浜松市博物館報』第 14 号

鈴木一有　2001 「浜松市域における中世集落の消長と地域開発」『浜松市博物館報』第 14 号

鈴木京太郎　2021 「第 4 章 詳細報告 3 恒武西宮遺跡 26・28・29 次調査報告（2）26 次調査の成果」『令和元年度　浜松市文化財調査報告』

鈴木正貴　1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2000 『恒武西宮・西浦遺跡』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002 『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』

（財）浜松市文化協会　1998 『梶子北遺跡　遺物編』

（財）浜松市文化協会　1998 『山ノ花遺跡』

（財）浜松市文化協会　2002 『恒武西宮遺跡』

（財）浜松市文化協会　2009 『恒武西宮遺跡 8 次』

浜松市教育委員会　2003 『浜松市遺跡調査集報』

浜松市教育委員会　2004 『有玉古窯』

浜松市教育委員会　2009 『浜松市試掘調査概要』

浜松市教育委員会　2011 『平成 21 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2012 『平成 22 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2016 『平成 26 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2017 『平成 27 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2018 『平成 28 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2018 『恒武西宮遺跡 6 』

浜松市教育委員会　2019 『平成 29 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2020 『平成 30 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2021 『令和元年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2022 『恒武西宮遺跡 7 』

浜松市教育委員会　2022 『令和 2 年度　浜松市文化財調査報告』

浜松市教育委員会　2023 『令和 3 年度　浜松市文化財調査報告』

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	種別	細別	残存率(%)	反転	器径(cm)	器高(cm)	口径(cm)	色調	焼成	備考
13	1	63	SD04	土師器	高坏	40					橙	良	底径8.4cm
13	2	53	SD06	陶器	壺	10	反				明褐灰	良	底径8.6cm
13	3	54	SD10	須恵器	坏身	10	反				灰白	良	底径6.0cm
13	4	54	SD10	須恵器	壺	10	反			28.0	褐灰	良	内面自然釉
13	5	29	SD17	須恵器	坏身	10以下	反	14.0			灰	良	
13	6	29	SD17	須恵器	高坏	50				15.0	灰白	良	
13	7	29	SD17	須恵器	壺	10以下	反			31.8	灰白	良	
13	8	29	SD17	須恵器	壺	10	反			20.8	灰	良	頸径15.4cm
13	9	29	SD17	土師器	高坏	10	一部反				にぶい橙	良	
13	10	29	SD17	土師器	高坏	20					浅黄橙	良	
13	11	29	SD17	土師器	高坏	10以下	反				浅黄橙	良	
13	12	29	SD17	土師器	高坏	10以下					にぶい橙	良	
13	13	29	SD17	土師器	壺	10以下	反			18.8	浅黄橙	良	
13	14	29	SD17	土師器	壺	10以下	反				にぶい橙	良	底径3.6cm
13	15	29	SD17	土師器	壺	10	反				橙	良	底径7.0cm、黒斑
13	16	29	SD17	中世陶器	山茶碗	30	反				灰白	良	底径7.6cm
13	17	40	SK06	土師器	高坏	10	反				にぶい橙	良	
13	18	40	SK06	土師器	二重口縁壺	20	反			10.8	にぶい橙	良	頸径7.2cm、外面線刻
13	19	36	SK09	須恵器	壺	10	反			24.0	灰	良	外面自然釉
13	20	58	SK12	土師器	高坏	10	反				橙	良	
13	21	58	SK12	土師器	高坏	30	反				にぶい橙	良	
13	22	68	SK13	土師器	把手	10					橙	良	
14	23	39	SK14	須恵器	器台	10以下	反				灰	良	スカシヨもしくは4方向か?
14	24	55	SK14	須恵器	坏蓋	10	反	12.6		12.4	灰	良	
14	25	39	SK14	須恵器	壺	10以下	反			26.8	灰	良	
14	26	39	SK14	土師器	高坏	20	反				橙	良	
14	27	39	SK14	土師器	高坏	10	一部反				にぶい橙	良	
14	28	39	SK14	土師器	壺	10以下	反				にぶい橙	良	底径6.3cm
14	29	55	SK14	中世陶器	山茶碗	20	反				灰白	良	底径7.4cm、底部糸切
14	30	39	SK14	中世陶器	山茶碗	20	反				灰白	良	底径7.8cm、底部糸切
14	31	39	SK14	中世陶器	山茶碗	20	反				灰白	良	底径7.2cm、底部糸切、内面自然釉
14	32	39	SK14	中世陶器	山茶碗	10	反				灰白	良	底径7.6cm、底部糸切
14	33	39	SK14	中世陶器	山茶碗	10	反				灰白	良	底径6.6cm
14	34	39	SK14	中世陶器	山茶碗	20	反				灰白	良	底径9.6cm、内面自然釉
14	35	39	SK14	中世陶器	山茶碗	10	反				灰白	良	底径8.2cm、底部糸切
14	36	60	SE01	土師器	壺	10以下	反			28.0	橙	良	頸径21.4cm
14	37	67	SE01	中世陶器	山茶碗	100			5.3	15.0	灰白	良	底径7.3cm、底部糸切、内外面自然釉
14	38	28	SX01	須恵器	壺	10	反			17.8	灰黄	良	内面自然釉
14	39	28	SX01	土師器	高坏	10以下					淡黄橙	良	
14	40	40	SX01	中世陶器	山茶碗	20	反				灰白	良	底径7.4cm、底部糸切
14	41	5	遺構外	須恵器	坏身	30	反				灰	良	
14	42	2	遺構外	須恵器	無台碗	10	反				灰	良	底径6.0cm、底部糸切
14	43	30	遺構外	須恵器	有台坏身	20	反				灰	良	底径9.6cm
14	44	2	遺構外	土師器	高坏	20	一部反				橙	良	
14	45	5	遺構外	土師器	折返口縁壺	10以下	反			12.6	橙	良	
14	46	4	遺構外	土師器	把手	10					浅黄橙	良	
14	47	5	遺構外	中世陶器	山茶碗	30	反				灰白	良	底径7.6cm、底部糸切
14	48	5	遺構外	中世陶器	山茶碗	10	反				灰白	良	底径8.2cm、内面自然釉

1　調査区北東部 完掘状況（北東から）

2　調査区北西部 完掘状況（北東から）

1　SD02・SD03 完掘状況（北西から）

2　SD04 遺物出土状況（北西から）

3　SD06 完掘状況（南東から）

1　SD16 完掘状況（南東から）

2　SD19・SD21 完掘状況（南東から）

3　SK13 遺物出土状況（北西から）

1　SK16 完掘状況（北から）

2　SX01 完掘状況（南東から）

3　SE01 遺物出土状況（北東から）

1　SD04・SD17・SK06・SK09 出土遺物

2　SD17 主要出土遺物

1　SK13・SE01 出土遺物

2　SX01 主要出土遺物

3　SK14 主要出土遺物

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	恒武西宮遺跡 8（つねたけにしみやいせき）
編著者名	川西啓喜（編）、井口美奈
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652　浜松市中央区元城町 103-2 TEL(053)457-2466　FAX(050)3730-1391
発行年月日	2024 年 3 月 22 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
恒武西宮遺跡（つねたけにしみやいせき）	静岡県 浜松市 中央区 恒武町	221384	2-02-12	34 度 45 分 33 秒	137 度 47 分 34 秒	2023 年 1 月 10 日 ～ 2023 年 1 月 24 日	285 ㎡	駐車場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恒武西宮遺跡	集落跡	古墳時代 鎌倉時代	溝 土坑 小穴 井戸	土師器 須恵器 中世陶器	古墳時代後期の祭祀遺構と鎌倉時代の井戸を 1 基検出した。

要約	恒武西宮遺跡は、天竜川の堆積作用によって形成された沖積平野に所在し、なかでも東を南流する豊田川、西を南流する安間川に挟まれた微高地に位置する。 今回の調査の結果、調査区の北側を中心に古墳時代と鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。古墳時代の遺構では、明確な建物跡は検出されなかったが、柱痕を伴う小穴が検出された。遺物は砕片が多いことから、当該地は集落の縁辺部に位置すると考えられる。その他に祭祀関連とみられる土坑を 1 基検出し、埋土から古墳時代後期の遺物に加えて、獣骨と円礫・角礫が出土した。 鎌倉時代の遺構は、井戸を一基検出した。確認された遺構数は多くないが、同時の遺物も一定量確認されたことから、周辺に同時期の集落が存在すると考えられる。

恒武西宮遺跡 8

2024年 3月22日

編集・発行機関　浜松市教育委員会
（浜松市市民部文化財課が補助執行）
印　　刷　中部印刷株式会社

Tsunetake-nishimiya Site

The 35th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture,Japan

March,2024

Hamamatsu Municipal Board of Education